

電磁気学 II(共通教育、田中担当クラス) レポート問題

提出期限: 6月26日の授業中に集める.

- ベクトル場 $\mathbf{A}(\mathbf{r})$, $\mathbf{B}(\mathbf{r})$ について, $\nabla \cdot (\mathbf{A} \times \mathbf{B}) = \mathbf{B} \cdot \nabla \times \mathbf{A} - \mathbf{A} \cdot \nabla \times \mathbf{B}$ を示せ.
- 次のような真空中の電磁波を考える.

$$\mathbf{E}(\mathbf{r}, t) = \mathbf{E}_0 \sin(\omega t - \mathbf{k} \cdot \mathbf{r}), \quad \mathbf{B}(\mathbf{r}, t) = \frac{\mathbf{k}}{\omega} \times \mathbf{E}(\mathbf{r}, t).$$

ただし, \mathbf{E}_0 , \mathbf{k} は定数ベクトルで, $|\mathbf{k}| = \omega/c$, $\mathbf{k} \cdot \mathbf{E}_0 = 0$. これは, \mathbf{k} 方向へ進む平面波を表している. ポインティングベクトルを求め, その向きが \mathbf{k} の向きであることを確かめよ.

- $\nabla \times \nabla \times \mathbf{A}(\mathbf{r}) = \nabla(\nabla \cdot \mathbf{A}) - \Delta \mathbf{A}$ を示せ.
- 球対称な系であれば, 静電ポテンシャルは動径 r のみの関数となる. すなわち, $\phi(\mathbf{r}) = \phi(r)$, $r = |\mathbf{r}|$ である.

(a) このとき,

$$\Delta \phi(\mathbf{r}) = \frac{1}{r^2} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{d\phi(r)}{dr} \right)$$

であることを示せ. これは球座標でのラプラシアンを表式 (§ 1.7, 式 (32)) の特別な場合である.

(b) 上の結果を利用して, 真空中で静電ポテンシャルが $-e^{-r/a}/(\epsilon_0 r)$ となるような電荷分布を求めよ.

- 電気双極子 p_1 が原点にあり, 電気双極子 p_2 が点 \mathbf{r} にあるときの, 電気双極子間のエネルギーを求めよ. さらに, p_1 と p_2 の向きが, $(\Rightarrow \Rightarrow)$, $(\Rightarrow \Leftarrow)$, $(\Uparrow \Uparrow)$, $(\Uparrow \Downarrow)$ の4つの場合について, 2つ電気双極子間に働く力が引力か斥力か調べよ.
- 厚さ $2d$ の薄い誘電体の板が一様に法線方向に分極している. 法線を z 軸にとると $\mathbf{P} = P\hat{z}$ である. (この分極は外場がなくても存在するものとする. このような分極を永久分極という.)
 - この誘電体の分極表面電荷密度, 分極体積電荷密度を求めよ.
 - 誘電体内外の \mathbf{D} , \mathbf{E} を求めよ.
 - 誘電体内外の静電ポテンシャルを求めよ.
 - この系を平行板コンデンサーと比較せよ.